

当事者と非当事者による対話的協働研究の方法論**三者対話式インタビューの可能性**

○ NHK 学園 林 幹泰 (009395)

岡 知史 (上智大学・000248)

キーワード：対話的協働研究・三者対話式インタビュー・1型糖尿病

1. 研究目的

本研究の目的は、1型糖尿病という慢性疾患を抱える当事者と、非当事者であるソーシャルワークの研究者（以下「研究者」）が対話を通じて知を共創する「対話的協働研究（Dialogical Collaborative Inquiry）」を基礎とし、先行研究ならびに理論的整理を通じて、1型糖尿病への理解を広げ、かつスティグマ軽減につながる研究方法としての三者対話式インタビュー（Triad Interview）、すなわち(1)当事者であり「研究者」である者、(2)当事者であるが「研究者」ではない者、(3)非当事者であり「研究者」である者の三者による対話的研究の可能性を探ることである(Finch et al., 2023)。

自助グループ研究や当事者研究では、当事者が当事者の言語で自らの体験や世界を語ることを重視し、支配的な専門職の言語に対抗してきたという歴史がある。しかし、それだけでは「当事者の体験は当事者にしかわからない」という言説が強化される。一方、社会福祉学では、ソーシャルワークのグローバル定義にみられるように「社会的結束」を強調してきた。当事者と非当事者とのさらなる分断を促進するような実践や研究は、社会福祉学には求められていないと思われる。

そこで、この研究においては、当事者以外には理解が難しいとされる1型糖尿病患者の体験への社会的理解が広がることを目指し、当事者2人の共感的対話によって深く掘り下げられた内容を、非当事者であり「研究者」である者の介在によって、非当事者に理解可能な形に改変されていく過程を追うための理論的基盤を明らかにしたい。

2. 研究の視点および方法

リアルタイム検索が可能であり、また出典元を明示する生成AI、Perplexity v4.0.0を用い、さらにGemini Deep Research (Gemini 2.5 Flash Experimental)、ChatGPT-4o (Deep Research mode)を用いて、検索漏れがないように文献を探索した。そしてScholar Google等によりハルシネーションの可能性を除去しつつ、出力されたものを著者2名が、文献のタイトル・要旨を精査し、一定の学術基準を満たし、研究目的に合致するものを選定した。その後、全文精読後に研究との関連性を協議し、文献探索の方向性を修正または焦点化して、再度、文献探索を進めるという反復的方法を採用した。その際、特に1型糖尿病患者の主観的経験を対象とした質的調査、1型糖尿病患者のスティグマ、対話的研究、当事者研究、オートエスノグラフィ、インタビュー手法について書かれた文献に注目した。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会の研究倫理規定に則り、調査対象者を伴わない文献研究として、知的誠実さと倫理性に十分配慮して実施した。なお、本報告に関連して開示すべきCOI関係にある企業等はない。

4. 研究結果

以下の3点が明らかになった。第一に、1型糖尿病に関するオートエスノグラフィの研究は、濱（2010）に代表されるように僅かに存在するものの、中林（2020）等による2型糖尿病に関連した対話的研究を除けば、1型糖尿病を対象とした対話的アプローチによる研究は、ほとんど見られない。

第二に、対話的オートエスノグラフィに関する研究は、沖潮（2013）をはじめとして一定の知見が示されているが、1型糖尿病に関するスティグマの解決を図るためには、社会全体への理解促進を目指すソーシャルワーク的なアクションへと結実する研究アプローチが必要とされる。ところが、既存の研究においては対話を行う当事者間での相互理解の確保を重視するミクロレベルでの視点が優勢であり、社会的な広がり志向するソーシャルワーク的な取り組みは相対的に希薄である。

第三に、三者対話式インタビューでは、フォーカスグループ・インタビューの手法や概念を応用できる点が挙げられた。たとえば、インタビューアが非当事者である場合、当事者は自己の経験や背景を一から説明する必要が生じる。しかし、そこにもう一人の当事者が同席していれば、両者の間で共通の理解が前提となり、会話はより深い内容へと迅速に展開されやすくなる。その結果、非当事者によるインタビューであっても、より深層的な語りを引き出すことが可能となる。

5. 考察

以下の3点を考察としたい。第1に、対話の促進のためには、非当事者が理解するための言語の開発が重要である。言語の重要性を強調する社会構成主義(Gergen, =2004)が、本研究の基本的哲学となるだろう。

第2に、自助グループは、スティグマ等から「解放に向かう考え方」(liberating meaning perspectives, Borkman, 1999)を重視していたが、真の解放に向かうためには、当事者と非当事者との対話が必要であり、本研究のアプローチは、自助グループ研究の限界を補うものにもなるだろう。

最後に、社会の分断と対立が深刻になっている現代社会においては、当事者と非当事者の相互理解が深まる研究が求められていることを強調しておく。